

# 井伏鱒二「遙拝隊長」論

——「噂」の効用——

## 一 「遙拝隊長」の論点

戦後改革期における井伏鱒二の小説には「復員者」や「未亡人」と称される人間像がしばしば登場する。また必ずといってよいほど山陰寄りの僻村が舞台になっており、<sup>(1)</sup> 中で絡み合う人間模様の描写に焦点が当てられている。村落内部の軋轢や騒動をテーマにするのは初期から続く傾向でもあるが、この時期の作品には戦争によって存続が危うくなった「家」の問題への着眼と、それを共同体内部の「噂」に基づいて肉づけしていく一種独特な叙述スタイルに、戦前とは区別される特徴がある。

戦場帰りの元陸軍中尉岡崎悠一の精神の変調が描かれた「遙拝隊長」(「展望」昭25・2)も、こうした作品群の延長

## 丁 世 珍

線上にあると、一応はいえよう。父親の死後に住み込み女中になった母親の履歴までもが、集落内で共有される噂話を交えて語られているのである。他方で、作中では悠一の母親に「未亡人」ではなく「後家」という呼称が使われており、これらの呼称の歴史的背景を踏まえれば、いささか意外な印象も残る。「後家」は、土地の相続者を指名する用語として古くから使われている語で、近代の〈家制度〉とも深い関連を持つ。<sup>(2)</sup> ただし戦争との関連性は極めて薄く、年老いた女性を連想させることからその使用は戦後に「未亡人」に入れ替わり、減っていったことが指摘されている。<sup>(3)</sup> それに対して「未亡人」という呼称は、日露戦争前後から次第に増加し、第二次世界大戦後にいわゆる〈戦争未亡人〉が社会問題化したことを受けて「婦人公論」などの

女性雑誌を中心に爆発的に増えていった。<sup>(1)</sup>この傾向は、同時代に林芙美子が「河沙魚」〔人間〕昭22・1〕や「骨」〔中央公論〕昭24・2〕などの作品を通し、〈戦争未亡人〉の悲惨な生活を次々と書いていたことから裏づけられる。戦後改革期における井伏の作品においてもまた、「未亡人」は「戦争未亡人」として造形されており、如上の事実からもあえて「後家」という、〈家制度〉を連想させる語を用いる「遥拝隊長」の特色がうかがわれるのである。

一方、これまでの「遥拝隊長」論は、〈ミリタリズム〉や〈コンフォルミスム〉への諷刺と批判が読まれた同時代評を、おおむね継承・発展する形で進められてきたように思われる。<sup>(2)</sup>なかでも〈この名のない農村が、戦後の日本の縮図のような印象をあたえます〉として、単なる戦争批判ではない点に小説の意義を示唆した中村光夫「井伏鱒二論」〔文学界〕昭32・10・11〕の評価が定着している。そのうえで、岡崎悠一とその周辺人物たちの戦後のありようを問うた人物論は、今日まで「遥拝隊長」論の主流をなしている。<sup>(3)</sup>もちろん、本稿は決して作者の反戦精神を評価する先行研究を否定するものではない。だが、従来の研究には個々の人物造形の分析と折りあわぬまま、それぞれが戦争の〈加害者〉であると同時に〈犠牲者〉でもあるとする一種の循環

論法に陥りがちな傾向があり、この点にあらためて問題を提起したいと思うのである。

その際に留意したいのが、地の文の語りから見受けられる主観性の問題である。たとえば、小説の冒頭部分には悠一によって引き起こされる集落内のどさくさの様態が、戦後に村に訪れたよそ者たちの話を交えて語られている。いずれも悠一から号令をかけられているのだが、敗戦後まだ間もない時にやつて来た二人の青年は逃げてしまったものの、後に来た海岸町の青年は悠一に殴りかかり、仲裁に入った村人と口論までする。興味深く思われるのは、その語り方である。三人称の全知の視点がとらえられているにもかかわらず、逃げていった青年たちの様子が「怖ぢけたものと思はれる」〔戦争中に軍隊用語に対して一もく置いてゐた情性かもわからない〕という推量形で示されている。類似のことは海岸町の青年に関する話についてもいえるが、さらにここには悠一が家に連れ戻されていく場面に続き「あとは、ゆつくりと二人で悠一の噂をしさへすればいいわけである」として、青年と村人に対する主観的で冷笑的な言辞も添えられている。憶測をたくましくすれば、語り手は読者に対して悠一をめぐる「噂」を伝えるばかりではなく噂話の主体としても機能しているように思われるの<sup>(4)</sup>

である。

ここから注目されることは、集落内の「噂」にもとづく「遥拝隊長」の語りは、それ自体が噂話として機能するがゆえに、読者をして様々な解釈を生み出させるということである。さらに先取りしていえば、その解釈のいずれもが、「噂」から浮かび上がる村落共同体の土俗的な生き方の方に引き込まれ、相対化されかねない問題を残していると考えられる。したがって作品の解釈には、噂話のレベルに近い語りと作意のレベルを相互に合わせて見ていく複眼が求められるのである。

あわせて、悠一の傷害の原因が明かされる戦場の話も、右の事情に留意して読み返してみる必要があるように思われる。マレー戦線での転落事故の一部始終は、笹山部落を舞台とする語りでは推測のレベルに留まっていたが、村人の与十がシベリア帰りの汽車のなかで悠一の元従卒と隣り合わせになった話と共に語られていく。後述するように、マレー戦線の話にも悠一の集落内での様子を伝える語りとさほど変わらぬ噂話としての性質が表れている。またこの二人のシベリア抑留体験者の登場は、実は、引揚げ者による手記類の氾濫した同時代状況とリンクしており、こうした戦場の話の特質に注目することで、戦後改革期における

文壇・ジャーナリズムの特殊性を見ずえる作者のまなざしが浮上してくると考えられるのである。

以上の点を踏まえ、本稿では元陸軍将校岡崎悠一とその「家」の履歴に関する語りへの詳細な分析を行い、戦略として「噂」の持つ効用について論じたいと思う。おそらくここには、噂話という伝承形式がそうであるように、戦争より古い歴史を持つ共同体的な生き方への視座が示されているはずで、集落内の噂話から浮かび上がる村落共同体の一見無原則的で倫理の一貫性に欠けるありようが、はからずも戦後という時代の矛盾を映し出す鏡ともなることを明らかにし、「遥拝隊長」の単なる戦争批判や共同体批判にとどまらぬ批評性を提出してみたい。

## 二 「噂」する語り手

悠一をめぐる情報は、集落内で共有されている噂話と、戦場での転落事故に関する事実を通して読者に示されている。まず、集落内の噂話は、精神障害の発作症状が進んだ理由と跋行になった原因の二つに大別される。と同時に、「はじめのうち」から「そのうち」へ、また「戦争中」から「敗戦後」へといった時間の経過を示す表現によって、事件の真相よりも真相探しの行為をそれ自体を目的として膨

らんでいく噂話の特質が浮上する。たとえば発作の悪化した理由については、「はじめのうち」は「悠一が戦地で悪疾に感染した結果だらう」と言われていたが、「そのうち」に「親ゆづりの梅毒のためだといふ憶説」も出て、これが「刺激的なせる」か、一時はかなり「有力な説」になったとも語られている。

一方、「親ゆづりの梅毒」という因果が「有力な説」になっている点から、悠一をめぐる「噂」の土俗的な志向がうかがわれる。それは足の傷害をめぐる次のような噂話からも確かめられる。

脳を悪くして記憶を喪失したと云ふならそれまでだが、どうして足がびつこになつた、とたづねても、殆んど浮かぬ顔で、漠然としたことさへも答へない。これは戦傷兵として謙譲に処する態度にも通じるので、はじめのうち近所の人たちも、悠一の無口は謙譲の美德の顕はれだと云つてゐた。それが敗戦後には、近所の人たちから、親の因果が子に報ふ譬へばなしにまでされるやうになつた。

右の引用文から、跛行の原因探しに始まつた噂話が、「漠然としたことさへも答へない」悠一の無口に触発され「親の因果が子に報ふ譬へばなし」という一種の伝承にまで飛

躍していく様態が見てとれよう。悠一をめぐる「噂」は単に刺激的な方向にエスカレートしていくばかりではない。それを生成する集落の強い土俗性に支えられているのである。

また、ここには語り手の共感的な姿勢も指摘することができる。悠一の精神と足の傷害に関する噂話は、父親の死後に出稼ぎで立派に「家」を改築した、母親の履歴を間に挟んで語られている。「親の因果」に帰結する集落内の噂話からは、閉鎖的な村落社会で急に富を蓄積した家系に憑くとされる〈憑き筋〉の影響が見受けられ、作中の噂話はそれを連想させる形がとられていると考えられるのである。この他にも、海岸町の青年とつかみ合いの喧嘩になつた際の悠一の顔が「狐のお面」に喩えられていたり、自由な足で斜面を敏捷に登る理由が「狐つき」という民間伝承にそつて説明されるなど、その土俗的な性格がさりげなく示唆されている。

くわえて、こうした語りの土俗性は、その主観的な語り方によつていっそう際立つものでもある。語り手によれば、村長と小学校長の推薦を受けて幼年学校に応募した悠一は、士官学校を出てから三年目にマレーに派遣され、その翌年に中尉に任官した。ただし、この事実も笹山の人々も

母親から聞かされて知っているが「それから後の経過がわからなかつた」として、右記の「親の因果が子に報ふ譬へばなし」が挙げられている。このように悠一の集落内での様子を伝える語りは、彼の無口によつてもたらされる限界を決して超えることがない。そして「噂」は、そこから生じる話の空白を埋める手立てになつていくことに気づく。語り手は村人の側に寄り添つて、ときに村人に同調し、ときに主観的な判断を付け加えながら、結局は噂話に過ぎぬ話を再三にわたつて提示してみせるのである。

作中における「噂」の位相については、悠一母子を村の最下層に置いた〈笹山村のヒエラルキー〉<sup>(10)</sup>をみたり、あるいは戦犯を裁くことの〈カタルシス〉<sup>(11)</sup>をみるといったぐあいに、前の大戦と関わる意味づけが既に行われている。「噂」という言葉がデマや流言飛語などに近い意味で用いられているという意味では、たしかに戦時体制との関連が認められる。しかし、先述の「親の因果」に結びつく噂話には、近代的な言説に収まりきらない要素が含まれているのも事実である。たとえば滝口明祥は、発作に関する「親づゆりの梅毒」説を受けて、〈母親による売春行為〉が父親の死の前から集落内で噂されていた可能性を指摘する。〈本当にあつたことかどうかは定かではないが〉ということわりが

付いているものの、こうした読みも「遥拝隊長」における「噂」というモチーフが前の大戦のみを射程に入れたものではない可能性を裏づけるものといえよう。

ちなみに、「遠野物語」の言語表現をもとに日本における村落伝承の位相を定義した三浦佑之<sup>(12)</sup>によれば、村落共同体内の噂話は当事者の周囲への興味が膨らんでゆくところに特質があり、そこには必ず〈予兆〉や〈前兆〉がある。こうした噂話の体系は村落共同体の〈暗部〉であると同時に、そのように語り継ぐことによつて共同体内に同じ災いが招来することを防ごうとする、村民たちの〈慎みの姿〉でもあるとされている。集落内の噂話にもとづいて語られる「遥拝隊長」の語りについても、こうした村落共同体における「噂」の両義性に留意する必要があるのではないだろうか。

ところで、前述の通り伝聞の領域を超えなかつたマレー戦線に関する語りは、村人の与十がシベリア帰りの汽車の中で悠一の元従卒、上田五郎と出会う場面から飛躍的な変化を見せはじめ。上田元曹長によれば、マレー戦線でゴム林の中を移動中に小隊長の悠一は「戦争ちゆうのは贅沢ぢや」と言った友村上等兵を停車中のトラックの上に昇らせ、殴りつけたのだという。その時、トラックが急発進し

て二人は横の川の中に飛ばされ、友村上等兵は行方不明になり悠一は脳を煩って送還された、というのである。

注目したいのは、このようにして明かされるマレー戦線の挿話そのものからも、一種の噂話としての性格がうかがえる点である。挿話から見られる悠一への呼称の揺れは、それを最もよく示している。挿話は始まりと終わりが長い棒線で区切られているのだが、棒線の間で悠一の名前が見られるのは三例に限られ、その後の呼称は「隊長」か「遥拝隊長」という別称で通されている。これらは笹山を舞台とする話には一度も示されていなかった呼称であり、上田によって作中にもたらされたものといえる。他方で、挿話の終わりを示す棒線の外には「この上田元曹長は、悠一つつあんを大きらひだと云つてゐた」「いまではむらむらと湧きあがつた憎悪の気持と、以前の怖さがすりかはつてゐるさうである」として、上田の発言が間接話法で示されている。「悠一つつあん」とは、与十が上田との会話中で用いている呼称なのだが、それを語り手がそのまま引き継いでいるわけである。

ここではまず、マレー戦線の挿話に内在する多声的で伝播的な性質が確認される。それは「悠一」から上田による「遥拝隊長」へ、また与十による「悠一つつあん」へと変

わつていく呼称の様相からも裏づけられよう。他方で、戦場の話の語り手である与十が悠一への「憎悪」を訴えている事実から、挿話の信頼性が問われるように思われる。そもそも挿話には、上田の目撃談の他にも「担架兵の報告」を始めとする多数の部隊員からの伝聞がつきはぎに織り込まれており、それらの話が悠一への「憎悪」を抱く上田の主観によって編集されている可能性は排除できない。表面上は転落事故の顛末として語られているものの、実質的には「岡崎悠一遥拝隊長」の告発ともいうべき性格も持ち合わせていると考えられるのである。

このように小説「遥拝隊長」は、元陸軍将校岡崎悠一をめぐって膨らんでいく噂話の世界でもある。ここには噂話の当事者である悠一の証言が徹底的に排除されており、土俗性と告発譚ともいふべき性格が緋い交ぜにされた語りの主観性が目立つ。と同時に、語りそのものが噂話として機能しているために、作中の事件や人物への評価が直ちにもう一つの噂話によって相対化されかねないという問題を生み出しているのである。

次に、右の事情に留意しつつ、悠一の「家」の履歴にまで遡る作中の噂話の効用について考えてみたい。



### 三 「家」存続を願う「後家さん」

悠一の「家」の履歴は、母親の「家」を改築した話を中心に語られていく。母親は「家つき」で、その入婿であった父親は悠一が小学校にあがった年に亡くなった。「後家さん」になった母親は海岸町の旅館で住み込み女中として働き、その稼ぎで悠一が小学校の高等科を卒業する頃には「家」を改築している。語り手によれば、相当な資力をかけて「コンクリート造りの膨大な門柱」まで建て、その意気込みには近所の人たちも「一目置かないわけに行かなかった」とされる。そしてある日、村長と小学校長が「門柱」を誉め称え、悠一を幼年学校の「有資格者」として推薦すると申し立てた。「感激」した母親はその足で近所に駆けつけ、「今から思ふと、門柱をこさへといて、よかつたですらあ」と語ったのであるという。

先行研究における母親の評価には、息子に背負させた立身出世の願望、という点に批判と同情の交錯する傾向が見受けられる。とりわけ悠一の制服組入りに結びついた「膨大な門柱」には、母親の「有名」への憧憬<sup>(14)</sup>や「見栄」<sup>(15)</sup>へ近代日本を動かしてきた欲望<sup>(16)</sup>の象徴といった、否定的な意味づけが行われている。

注意したいのは、悠一の制服組入りが「家」の改築と関連づけられて語られる必然性は、実はどこにもないという事実である。日中戦争期における陸軍幼年学校の月謝は二〇円で、たしかに五円前後の公立中学の授業料とは雲泥の差があったものの、元来、将校は家系において継承される場合が多く、母子家庭出身の悠一が歩ける道ではなかったからである<sup>(17)</sup>。村長らがやって来たのが「軍当局から全国の各市町村に命令して、学徒たちが受験するやうに推薦制度で応募させる手段をとつてゐた」とされているように、悠一の制服組入りはちょうど母親が「家」を改築したのと時を同じくして本格化した戦時体制によるのが大きい。僻村育ちで教育水準も低いと思われる母親が、こうした時局の変動を見通したうえで「膨大な門柱」を建てたとは、なおさら考えられない。

作中で語られる母親の経歴を踏まえれば、「膨大な門柱」は、家長の死という危機と関係している。父親が入婿であった事実からも察せられるように、母親には前代から受け継がれた「家」を存続させねばならぬ義務があった。母親にとって突然の夫の死は、「家」の存続が危惧される深刻な事件として認識されたにちがいない。閉鎖的な村落社会において労働力の供出による家と家の関係は、村での生活を

維持していくうえで重大な条件になる。男性の半人前か七、八分の農仕事しかこなせないとされる女性として、母親の立場の弱さは想像に難くない。おそらく「家」を継ぐ男兒があることから再婚ではなくより高い収入が得られる出稼ぎを選んだのであろう。「女中」の経歴と「家」の改築には、こうした事情の中で家長の代理となった母親の「家」存続への執念が貫かれていたのである。その執念が、「膨大な門柱」を立ち上げさせたと思われる。近所に駆けつけた母親の「感激」ぶりからは、息子の立身出世への欲びよりもまず、村の有力者から認められた、家長としての安堵感が垣間見えるのである。

ただし、母親の過去の生活の様子には、戦時下の主婦たちの普遍的な生き方を連想させるものがあるのも確かである。周知のように、いわゆる一五年戦争下で主婦と子供との存在は、それまでとは位相を異にする重要性を帯びていた。なかでも夫や息子などの、「家」の相続者であり後継者になるはずの男たちを戦場に送った主婦たちの役割は大きい。日中戦争期に急増した女性の社会進出の背景には、男に代わって銃後を守る主婦を女性のあるべき姿とした戦時総動員体制の影響が指摘されている。また戦時下の未亡人に若い女性が多かつたにもかかわらず、再婚という選択肢に世

論が否定的であったのも、「誉れの家」や「英霊の妻」といった、主婦たちの連帯と共感を担保させるために作り上げられた言説と関連している。その一例である日本文学報国会編『日本の母』（春陽堂、昭18・4）には、「三代続く誉れの寡婦」や「家の為に子の為にお国の為に」励む母などの全国の模範的な主婦たちに関する四九篇の事例が、地名・実名と共に載せられている。戦争とは、主婦たちにとって「家」存続のための戦いでもあったわけで、その共同体的な営みは悠一の母親の「後家さん」になってからの生き方と軌を一にしているといえる。

結論から述べれば、悠一の「家」の履歴をめぐる語り方は、母親のしたたかな生活の様子をうかがわせる反面、それを戦時下の主婦たちの普遍的な境遇に重ねて読ませるところをも可能にする。重要に思われるのは、一見まったく次元を異にするかのように見える悠一の母親と戦時下の主婦たちの生き方が、いずれも共同体内における「家」存続の願望に支えられているという事実である。語りの主観性と、語る現在である「敗戦後」の強い磁場ゆえに、悠一の母親と戦時下の主婦たちの生き方に共通する、一種の原始的な生活の営みを発見することができるのである。母親の「家」を改築した「当時」の回想で締め括られる小説の末尾には、



こうした語りの効用が端的に示されている。

四人の者が村道に出て悠一のうちの前を通るとき、お袋が杉垣のかげの車井戸で水を汲んでゐた。やはり悠一のお袋が、母屋を改築してコンクリートの門柱を立てた折り、同じところに改装した井戸である。その釣瓶繩を手繰る音は、甲高く部落ちゆうに響き渡る。耳に突きさすやうな響きだが、いつか村長が、悠一のお袋の前でその音を讚めた。(中略)「あの音は、遠くからきいてをると、まるきり鶴の鳴き声に、そつくり生き写しですなあ。鶴、九臯に鳴きて、云々……。これは、目出度いことの意味ですからなあ。」/さういふ、見えすいたお世辞を述べた。それでも悠一のお袋は、當時、近所ちゆうに釣瓶の音をきかせるため、必要以上に水汲みをしてゐたのであつた。

村人による目撃談の形で書き出される末尾の場面は、主観的な判断を強調する文末表現「のであつた」で締め括られており、一貫して噂話の性格を呈している。「家」を改築した折に改装された車井戸の釣瓶繩を、母親が「近所ちゆうに釣瓶の音をきかせるため」に水汲みをしたという言述から、集落内における「家」存続への執念をうかがうことができよう。さらに戦後もそれを「手繰る」姿には、「当

時」と変わらぬしたたかさをもって「敗戦後」を生き抜く、その執念の不変性が示唆される。岡崎家の戦時中の栄華は敗戦と共に廃れてしまったが、祖先から受け継いだ「家」を存続させようとする願望は、戦争よりも長い時間を連続してきているわけである。

ちなみに、先行研究で悠一に同情的な評価が向けられている理由も、右に通うところがあると考えられる。母親は、悠一が発作を起こして他人と張り合うことになるのを納戸の檻に閉じ込め、二、三日経ったら「近所へお詫びを云ひに」とまはりした後で、檻の木戸をあける手順になつてゐる」とされる。そして悠一は、発作が収まっている時は、野良仕事の手伝いや傘張りなどで老母と二人きりの家系を支えている。半人前の労働力でありながら共同体的な生き方を続けていく様子は、読み手の共感を呼び起こすに充分であろう。噂話として機能する小説の語りは、はからずも、共同体的な秩序のなかに包み込まれていく悠一母子の慎み深い生き方を浮き彫りにしているのである。

一方、村長の「見えすいたお世辞」や母親への「必要以上」にといった後づけの解釈から、母親の「当時」の生き方が一種の虚栄譚に意味づけ直されていく事態が見てとれないだろうか。作中の現在である「敗戦後」は、いわゆる

軍神とその遺族の悲惨な生活を当たり前とする時期であった。母親の「家」存続への執念は、戦時中の名譽ある（英霊の妻）から戦後に精神的・経済的に困窮する（戦争未亡人）に一変した、戦時下の主婦たちの境遇と重ね合わせて語られているようにも思われる。

ところで先述の通り、戦時下の主婦たちの連帯を担保したのは、同じ言説を共有することで得られる共同体意識であった。極端な言い方をすれば、母親の「家」存続への執念も噂話として機能する小説の語りも、それが拠って立つところは、こうした共同性への希求であるという点で根は同じであろう。語り手は限りなく村人に近い立場から、古人の詩句を挙げつつ母親を煽った村長のうそを暴露しているのだが、その語り方から村人の戦争との関わりが示唆されるのである。

このように母親の「家」を改築した「当時」の回想で締め括られる小説の末尾には、「敗戦後」から「戦争中」を批評する語りの指向性が見てとれる一方で、それよりも古い時代から根深く続いてきた共同体的な生き方も浮かび上がってくる。おそらく悠一とその「家」の履歴をめぐって読者に噂話をする語りの最大の批評性は、こうした「敗戦後」の磁場に引き込まれていく語り、村落共同体の土俗的な

生き方によっておのずと相対化される、そのありようから見出せるのではないか。

最後に、こうした語り方の持ち得る批評性について、作者の戦後改革期への視座を踏まえつつ検討してみたい。

#### 四 〈戦争〉が夢想されるとき

作中には、小説の現在が「敗戦後」という曖昧な言葉で示されているが、これを昭和二四年の晩秋に特定するのは決して難しいことではない<sup>20)</sup>。周知のように、この年は共産圏における日本人俘虜の本格的な引揚げ・復員が行われた時期でもある。また、ちょうどそれと時を同じくして、前の大戦の体験者が戦争秘話や戦場の裏話などを綴った（記録文学）が爆発的な人気を博していた。未亡人の身の上相談や手記類は婦人雑誌を中心に盛んに取りあげられ、なかでもソ連抑留体験記や高級将校による回想記などの人気は、大衆文芸総合雑誌を問わず、既成文学のそれを凌駕していた。

こうした出版形式については、しかしながら、武勇談の域を出ない完成度の低さやセンチメンタリズム<sup>21)</sup>、作為不作為の問題などが当時から指摘されており、実際に社会問題化した例も少なくない。いわゆる（吉村隊事件）は、その

代表的な例といえるであろう。池田重善こと吉村隊長による抑留所内の日本人俘虜リンチ事件として、昭和二四年三年一三日付けの「週刊朝日」に「吉村隊を裁けーソ連抑留記録からー」という見出しのスクープ記事によって初めて世に知られた〈吉村隊事件〉は、ソ連から帰還した元吉村隊員の伝聞談話<sup>(26)</sup>が報じられたことから世間の耳目を集めた。だが、真相調査の過程で吉村隊長の援助者として名指された元隊員が冤罪を訴えて自殺するなど、証言の信頼性や人民裁判の問題が次々と浮上する。とくに吉村隊の存在を初めて世に知らせた清水正二郎『国境物語』（第一文庫、昭24・1）の虚構工作が発覚し、さらにその虚偽を認知しつつも報道したジャーナリズムの作為までが露わになったのであった。<sup>(27)</sup>当時、ソ連に関しては、鉄のカーテンにつつまれたナゾの国<sup>(28)</sup>というイメージに国民の関心が注がれており、〈吉村隊事件〉はそうした戦後社会の商業主義と感傷的で主観的になりがちな戦争体験記とが結びついて生み出された、最悪の形であったといえる。実際、抑留体験者の叙述に関する研究では、敗戦を国内で迎えた日本人との意識のギャップや、自らの抑留体験をほとんど無媒介に戦争責任へと連絡させる被害者意識などが指摘されている。<sup>(29)</sup>「遥拝隊長」の作中の時間は、まさにこうした雰囲気のみをか

に定められているのである。

先にも触れたように、上田元曹長によって明かされるマレー戦線の話には、その多声的で伝播的な性質と悠一への告発ともいふべき性格がうかがわれる。それは、転落事故が起こった原因を後づけていく、語りの指向性からもいえる。たとえば事故の話の直後には、友村上等兵の死の責任について語った岡屋という兵士の噂話が続く。岡屋によれば、友村の奇禍には最初「なんちゆう贅沢なことぢや」と言った自分に一割の責任が、またトラックを急発進した運転兵に二割の責任があるのだが、余りの七割の責任を誰が引き受けるべきかは知らない。これを受けて語り手は、「友村が故障車から落ちるとき、友村にすがりついた隊長の引き受けるべきものだといふ意味だらう」として、その言外の含みを解析してみせるのである。さらに挿話には、「生前の友村上等兵」に関する一〇枚程度の思い出話も添えられている。友村は炊事兵から鶏狩りを頼まれて断つたことが一度あるのだが、それがちょうど悠一が中尉任官の内命を受けた当日で、その件を悠一も耳打ちされていたという他愛のない話である。このようにマレー戦線の挿話には、転落事故の経緯とはまったく関係のない話が、いかにも関係あるかのように付け加えられており、友村の死の原

因を「岡崎悠一遙拝隊長」に転嫁していかうとする、一貫した指向性も見受けられる。それは戦場での出来事を語り終わった上田が、「みんな遙拝居士の出しやばりが原因だよ」と述べていることから証明される。

しかしながら転落事故の経緯から結果的に浮かび上がるのは、友村の死をひとりの将校の責任に転嫁させようとする上田の無謀さでもある。事故の話は、悠一の小隊が敵の爆弾で跳ね飛ばされた、そのコンクリートの橋の前に辿り着く場面から始まっている。工兵隊の架橋工事が終わってトラックで渡ろうとすると、友村の乗っているトラックが橋の真ん中で故障した。悠一が友村を昇らせたのも、このトラックの上である。つまり友村の死には、もし悠一が友村を昇らせたのが故障車の上ではなかったら、あるいは友村を殴りつけた瞬間に故障車が急発進しなかったら、といった見方によって変わり得る幾通りかの原因が存在するわけである。

こうした挿話の性格から、戦争秘話が流行し消費されていた同時代との関連が推察されないだろうか。シベリア抑留体験を持つ上田元曹長は、作中で戦友を不当な死に至らしめた軍国主義者への告発を行っており、その点で、同時代における文壇・ジャーナリズムの流行的な風潮を想起さ

せる。従来、マレー戦線の話には、庶民の立場から（戦争の非人間性<sup>(3)</sup>）が暴かれている箇所として高い評価が与えられてきた。ただし、その告発者である上田は、戦争への被害意識を積極的に語ることによってはじめて戦争に関わった過去から自らを切り離し、戦後社会における被害者になり変わることもできるわけで、ここにはその上田によって体现される、戦争秘話の流行する風潮への批判も見てとれるのである。

一方、与十もシベリア抑留体験者として戦争への被害意識を積極的に語っている点では上田と変わらないが、彼が悠一と同じ集落の人間であるという事実から、戦後と村落共同体を関連づける作者の視座が想定されるように思われる。

具体的な例を、村の共同墓地を舞台にして描かれる墓詣りの場面から挙げてみたい。墓場には、死んで自分の血を分けた者から祭られねば死後の幸福は得られないという、「家」存続の願いが託されていると言われる。そうしてみると墓詣りとは、先代から家々に受け継がれてきた遺風でもあるといえよう。与十は、その墓詣りを「封建時代の残滓」であり「自由の主義に反する」と言い張る一方で、東方遙拝の号令をかける悠一を見て「みんな気違ひどもの、

お芝居だつたんだ」と罵倒もする。他方で、この場面には共同墓地の墓を一つひとつベルトで擲りつける悠一の姿も一緒に描かれている。与十の否定する墓場の封建的遺制が、「軍国主義の亡霊」であり「ファツシヨの遺物」であるとされる悠一によって否定される皮肉な事態が起こっているのである。

この墓詣りの場面には、第一に、自らの抑留体験を戦争責任に連絡させ、その被害意識のゆえに旧村の伝統まで軍国主義時代の「残滓」として拒む与十の傲慢さが暴露されていると考えられる。戦後改革期における連合国軍の民主化・自由化改革が軍国主義的風潮の撲滅を、なかでも農村に残存する〈封建的抑圧〉と〈経済的束縛〉の払拭を中心に行われたのは周知の通りである。たしかに、かつてのムラは近代日本の創出と共に伝統的な体系を失い、国民国家制度の基礎として政治的な領域に織り込まれることになった。しかし、戦後における共同体論の流行に示唆されるように、イエとムラの問題系は制度そのものにあるのではない。近世三百年余りにわたる旧村の共同体意識が辿ってきた、異質な経路にこそあるはずだ。<sup>20</sup> 与十の傲慢さには、戦時中の話を享受することが流行する一方で、戦前のすべての価値観が軍国主義の原因として否定されていく戦後改革

期の矛盾が反映されているとはいえないか。

もつとも、封建的遺制を拒否すると威張っていた与十は、結局は村人と共に墓詣りをし、悠一に従って東方遙拝も真似させられている。その際に、与十に墓詣りを決心させた村人の「与十さんは、ソ連の地の郷に入り、郷に従つたら、自分の郷に帰つて、郷に従へんわけがなからう。人間の生涯には、素通りせんければならんものが、なんぼでもある」という言葉は、期せずして戦後社会を批評する表現にもなり得ていると考えられる。この言葉は、戦後もなお軍国主義者として生きる悠一を包み込んだように、戦後改革期の矛盾を体现する与十をも「こうち」のなかに受け入れていく村の無倫理的で融通無碍な生き方を浮かび上がらせており、村人がいかにして無謀な戦争の支えになっていたかをうかがわせる。しかしその一方で、そのような村落共同体の生活の原理によって簡単に相対化されてしまふ、戦後改革期の流行的な言説の浅はかさも露呈させるのである。

言い換えれば、悠一と与十を包み込む村人の生活の様子は、日本の村落共同体と戦争の関わりを示唆する反面、同時代の皮相的な言説を声高に主張する人物たちの浅はかさや跳ねかえすバネにもなっている。「遙拝隊長」は、長らく作者井伏の戦争認識を読む素材になってきたが、こうし



た共同体的な生き方の暗部としたたかさを同時に浮き彫りにする語り方に注目することで、先鋭な戦後批判も読みとれるという事実を押さえて置きたい。

## 五 戦後への視座

〈人間が共同のし組やシステムをつくって、それが守られたり流布されたり、慣行となったりしているところでは、どこでも共同の幻想が存在している〉。幻想としての国家論を唱え、原始的・未開的な幻想の現代的な解釈を試みた吉本隆明『共同幻想論』（河出書房、昭43・12）における右の言葉は、作中で様々な言説が生まれ、消滅していくプロセスを的確に説明している。かつてイエとムラを維持させ国家をも立ち上げた共同の幻想は、一方では狂暴で無残な戦争をも可能にした。集落内における岡崎悠一（悠一）の存在は、この村落共同体が支えた戦争の狂気そのものの証明でもあるといえよう。他方で、戦争などまるでなかったかのように悠一を包み込んでいく村のありようには、戦争より古い歴史を根深くきざんできた村落共同体のしたたかな営みも垣間見える。作者が「遥拝隊長」の舞台を日本の普遍的な村落に設定し、噂話という最も古い伝承の形式を再現してみせた背景には、そういった庶民の土俗的な生き方に内在

する二面性への畏怖と評価があったと考えられる。

以上、悠一をめぐる「噂」の特質と、そこから浮かび上がる母親の「家」存続への執念、そして二人の帰還者の登場を通して示唆される同時代状況の三点に注目し、語り手が具現する「噂」という姿勢の批評性および作者井伏の戦後への視座を確認した。まず、集落内の噂話にもとづく語りは、強い土俗性と主観性に貫かれており、これに留意して悠一の「家」の履歴を遡る語りを検討することによって、戦時下の主婦たちの普遍的な生き方と軌を一にする母親の「家」存続への執念が浮上する。語りの主観性と、語る現在である「敗戦後」の強い磁場のなかで、読者は悠一の母親と戦時下の主婦たちの生き方に共通する、一種の原始的な生活の営みを発見することができるのである。一方、ソ連抑留体験を持つ与十と上田元曹長の登場と共に明かされるマレー戦線の話からは、「岡崎悠一遥拝隊長」への告発ともいべき性格が見受けられ、戦争秘話が流行的に消費されてきた同時代の文壇・ジャーナリズムへの視座を想定させる。そして与十の言動には、戦前におけるすべての価値観は封建的遺制として否定されていた、戦後改革期の矛盾した諸相が反映されている。その際に、「お互」や「こうち」、「人間の生涯には、素通りせんければならんものが、なん



「ほどもある」といった、村人の生活の原理を示す言葉は、そういった同時代の俗悪な言説を跳ねかえす表現になり得ているといえる。

元陸軍将校とその「家」の履歴をめぐる噂話を通して、歴史を持続する共同体的な生き方の悪食性と強靱さを同時に浮き彫りし、これをもって戦後改革期の矛盾をもあぶり出す語りの戦略。このしたたかな複眼的方法にこそ、「遙拝隊長」の単なる戦争批判や共同体批判ではない、先鋭な戦後批判と時代批評を見ることができよう。

#### 【注】

(1) なかには増富溪谷の「山峡のぬし」から聞かされた伝承譚であるとされる「山峡風物誌」(改造)昭23・3)のように、民俗学者の筆致を思い浮かばせるものもある。

(2) 青木デボラ『日本の寡婦・やもめ・後家・未亡人』(明石書店、平21・11)。

(3) 鹿野政直『女の戦争史⑩戦争未亡人』(朝日ジャーナル)昭58・5・27)。

(4) 川口恵美子『戦争未亡人被害と加害のはざままで』(ドメス出版、平15・4)、千代田明子『戦争未亡人の世界 日清戦争から太平洋戦争へ』(刀水書房、平22・12)を参照。

(5) 小説における井伏の〈狂信的なミリタリストに対する怒りと憎しみ〉を読み取った河盛好藏「文藝時評」(朝日新聞)昭25・2・19)や、〈数と力とコンフォルミスムに対する、作者の批判の抑制された反感〉を指摘した寺田透「最近の井伏氏」(『現代日本文学全集』第四一卷・井伏鱒二集(筑摩書房、昭28・12)など)。

(6) 〈単に公式的な戦争批判でなく、庶民の立場(生活感情)から戦争の非人間性〉が暴かれていると見た東郷克美「井伏鱒二素描―「山椒魚」から「遙拝隊長」へ―」(『日本近代文学』昭41・11)や、〈戦中戦後を通じてその意識になんらの変革をも加えていない〉(庶民)への批判を読んだ白石喜彦「庶民における意識の不变―「遙拝隊長」論」(『現代国語研究シリーズ 井伏鱒二』(尚学図書、昭50・5)が代表的である。

(7) 悠一の〈被害者としての悲劇〉と村人の〈温情主義〉に着目した相原和邦『「遙拝隊長」の構造と位置』(『近代文学試論』昭54・9)は、「遙拝隊長」論をめぐる人物論の嚆矢でもある。鶴田欣也「「遙拝隊長」論」(谷川泉・鶴田欣也編『井伏鱒二研究』(明治書院、平2・3)は、悠一の母親に対しても戦争の〈犠牲者〉であり〈加害者〉でもあるという見解を示している。また、近年の滝口明祥「ある寡婦の夢みた風

景―井伏鱒二『遙拝隊長』(『井伏鱒二と「ちぐはぐ」な近代―漂流するアクチュアリテイ』(みすず書房、平24・11))  
には、「被害者」であるとされた「庶民」の加害者性」が批判されている。

(9) これに関しては、前田卓昭「『遙拝隊長』の周辺」(『岐阜大学国語国文学』昭60・3)に悠一の部落内のありようが笹山の(内側にある視点から、あたかも噂話をするかのように語り出される)とした類似の指摘がある。ただし、その結果として悠一の(悪)と村人の(善)、そして母親への(憐れみ)が読まれている点については、小説の語り方の主観性の問題から疑問が残る。

(10) 河崎典子「井伏鱒二『遙拝隊長』論——「言葉」の戦争」(『成城国文学』昭60・3)。

(11) 栗坪良樹「『遙拝隊長』―戦争ワーカホリック―」(『国文学解釈と鑑賞』平6・6)。

(12) 滝口明祥注(8)前掲論文。

(13) 三浦佑之「村落伝承論『遠野物語』から」(五柳書院、昭62・5)。

(14) 相原和邦注(7)前掲論文。

(15) 遠田勝「『遙拝隊長』考——井伏鱒二における他者と共同体」(鶴田欣也『日本文学における(他者)』(新曜社、平6・11))。

(16) 悠一の制服組入りと関連し、初めて(立身出世)への欲望

を読み取ったのは栗坪良樹注(11)前掲論文である。同様の指摘は、母親の経歴を(一大サクセスストーリー)として評価する河崎典子注(10)前掲論文を受けた滝口明祥注(8)前掲論文からも見られる。

(17) 高野邦夫『軍隊教育と国民教育』(つなん出版、平22・9)を参照。

(18) 瀬川清子『若者と娘をめぐる民俗』(未来社、昭47・12)を参照。

(19) 若桑みどり『戦争がつくる女性像』(筑摩書房、平22・1)、上野千鶴子『ナシヨナリツムとジェンダー新版』(岩波書店、平24・10)など。

(20) 注(4)を参照。

(21) 右に同じ。

(22) 悠一が「大陸戦争が拡大したころ」高等小学校を卒業し、現時点で「三十二歳」であるとされている点およびその他の情報を合わせて逆算すれば、「大陸戦争」とは満州事変時を、現在は昭和二四年を指すと考えられる。また作中に「池干し」の言及のあることから、季節は晩秋に近い頃と推定される。

(23) 杉村武「『記録文学』論」(『文芸公論』昭24・9)。

- (24) 中島健蔵「記録文学の効果」(「なにを読むべきか」昭25・1)。  
 (25) 白井吉美「記録と記録文学」(「人間」昭24・9)。  
 (26) 「外蒙抑留所の怪事／同胞虐殺の「吉村隊長」」(「朝日新聞」昭24・3・15)。  
 (27) 「吉村隊事件「終戦」解釈の相違が次々と悲劇を生む」(「読売新聞」昭24・4・16)、「渡辺証人が縊死 吉村隊事件の偽証」を苦にして」(「読売新聞」昭24・5・12)。  
 (28) 「問題化した記録文学のウソ 吉村隊事件」(「読売新聞」昭24・5・15)。  
 (29) 『週間朝日』編集長扇谷正造氏談」(「読売新聞」昭24・5・15)。  
 (30) 丸川哲史『冷戦文化論』(双風舎、平17・3)、天野知幸「(記憶)の沈潜と二つの(戦争)——引揚・復員表象と西条八十」

(「日本文学」平18・11)などを参照。

(31) 東郷克美注(6)前掲論文。

(32) たとえば、(解体が防止され、道義の一義に置かれた家)とそれによる村落共同体の擬似性を問うている中村吉治『日本の村落共同体』(日本評論社、昭32・3)や、(家)を日本のファシズムを支えた(国体の細胞)に位置づける丸山眞男『日本の思想』『岩波講座現代思想』第一巻(岩波書店、昭32・11)は、ちょうど同じ時期に発表され、その後の共同体論をリードしたものである。

※本稿における「遙拝隊長」の引用は、所収刊本を定本とする『井伏鱒二全集』第一四卷(筑摩書房、平10・6)に拠る。資料の引用は初出に拠るが、旧字は新字に改め、ルビは適宜省略した。

